

石の人

寒川 康子

二〇一四年十二月に私は七十九歳になった。気づかない間に金婚も過ぎていく。それは然り気なく経った歳月に思われるが、しかし、振り返ってみれば何度も手術を体験している身であれば、よく無事にここまで生きて感謝をせずにはいられない。

入退院のくり返しは五十年近くの長きに及び、これからも病院とは縁の切れない日々が続く身体である。生涯をそうして送るといふ自覚もある。

病氣と共生する間に出会い別れた人も少なくない。

三度目の手術に入院していた時だった。S字状結腸巨大症の手術は思ったより厳しい病状にあった。後に知ったことだが、家族は私の葬儀を覚悟して準備をしていたという。それでも三週間余りを経過した私は個室から四人部屋へ移ることが出来た。四人一室のベッドには、二十九歳の私に甲状腺手術の二十七歳のOL、片足切断の自営業者の妻は三十一歳、出産から間がない二十七歳の母親は乳癌の手術をそれぞれにしていた。まだ若い女性四人の病室は入院生活とはいうものの、時には笑い声もするそれなりの雰囲気があった。

旧陸軍病院を改造した国立病院は広い敷地に木造平屋建てだった。外来診療棟から手術や検査を行う特別棟に七棟の病棟があった。その奥には娯楽のための会場や運動場を備えた精神病棟が建つ。精神病棟は中でも立派であった。食堂や売店は外出がままならぬ体であれば充分楽しく利用した。

私の入院する外科第三病棟は特別室に個室、二人部屋、四人部屋、六人部屋が男女別々にあったが、確かな部屋数をいまはおぼえていない。

術後の歩行訓練に私は病棟の中央廊下を一日に数回往復するのを日課にしていた。風が吹けば倒れそうといわれたが、それも徐々にしっかりと歩けるようになって、洗面所の一面で石を磨いている男性に気がついた。初老の男はいつ見てもひたすら石を洗っていた。

目礼している内に、ひととき会話をかわすようになったある日、男は石について話した。「石は磨いていると、不思議な模様が浮かんで来るかと思うと、怪しい彩が見えたりする。さまざまな表情が楽しみで退屈しない」と。

男の妻は隣室の四人部屋に入っていたが、長期の日々には一七回の手術があったと聞く。その歩く姿は鶴よりも細く足の運びも危うく見えた。和式の病衣のふところに数本の管が巻き込むように入っていた。言葉をかけるのもためられる様子に、私は顔を伏せて通り過ぎた。

病室の窓際に桜のつぼみがふくらみ始めていた。見舞の子供だろうか。甲高い声がする。

その日も石を磨いていた男が手を止めるとひっそりした笑顔を向けていった。「家内はほどなく死ぬだろうが、石を磨いていると丈夫になるのではないかと思う。私の心が神や仏に届きそうな気持ちにもなる。石はものをいわないがそれでもそんな感じが伝わって来る」

私は黙って頷いた。男のいうことは本当だと思ったのである。その手許には鮮やかな緑の石が濡れて光っていた。うつ向いた男は布切れを握り締めてまた一心に石を洗い始めた。

二か月が経った。退院から通院になった私は二週間ほど後に病棟を訪ねてみた。同部屋だった人はどうしているだろうかと思った。同じ苦痛を知る者同士のなつかしさに胸が詰まるのを覚えた。

石を磨いていた人にも会いたかった。だが見馴れた場所にその姿はなかった。聞けば男の妻は永眠したという。それまでも緊急の手術があったが助からなかったのだ。

脳裏にはかなげな女の影が浮んで私は思わず瞼を閉じた。

その日から長い年月が経つ。

今度こそ丈夫になろう、もう手術はしないで生きたい生きたいと願いながらも私の手術は一三回を数える。体にメスが入るたび私は石を磨いていた人を思った。願いをかけて石に向かうその後姿はどんな時も力強く見えた。それは私の心の支えになっていた。たび重なる手術に耐える力を与えてくれたのではないかと思う。

当時、長くは生きないだろうといわれた私は後期高齢者の仲間に入り、成人した

孫のある立場になって夫と共に生きている。

石は

億萬年を

黙って

暮らしつづけた

その間に

空は

晴れたり

曇ったりした

(壺井繁治)

社会派詩人「壺井繁治」のこの詩は、出身地の香川県のは小豆島の岬に建つ碑に刻まれている。かたわらに記念樹の「はまぼう」は時節になれば花が咲く。

石を磨く人を思いだす時、よみがえる詩である。

人生には最期まで何があるか解らないが、一步一步進んで行きたい。不服をいわずに石のように小さくも身の丈に合った存在としてこの世にあればいい。

寒川靖子

略歴

香川県三豊市（元・財田村）生れ。芸象文学会、
青焰の会明治神宮献詠会、日本歌人クラブ所属。
短歌結社「一路」「香蘭」から女流詩誌『ラ・メール』（故・吉原
幸子 新川和江代表 終刊）を経て現在に至る。著書に詩集・歌集・
小説集・創作集・随筆集・合同歌集など。